

雲仙市文化財調査報告書 第13集

Kuji
小路遺跡

Koujiro Kuji
—神代小路地区街なみ環境整備事業に伴う発掘調査報告—

2014

長崎県雲仙市教育委員会

-昭和21年頃に架けられた橋の基礎と道路-

水路（SD-1）の中央部分からは、水路を南北に横断するような形で橋の基礎と道路が検出された。道路表面は、5mmほどの玉砂利で舗装されている。人などが行きかっていたため、道路の表面は硬くしまっていた。この様な玉砂利で舗装された道路は、鶴亀城跡（2010辻田・村子）でも報告されている。現在、小路地区の道路はほぼ全てがアスファルトで舗装されているが、昔の道路は玉砂利舗装が一般的に用いられていたようである。

また、水路（SD-1）の北側護岸石垣と南側護岸石垣の前方部分からは、加工された石を方形状に並べた造構が検出された。この造構は、水路護岸石垣の前方に方形状（南北約1.5m、東西約3m）に張り出す形で造られている。水路の中央部分からは加工された石を長方形状（南北約1m、東西約3m）に並べた造構が検出されており、その周辺には同様の石が点在している。これらの造構は、橋の基礎部分と考えられる。また、橋の基礎が検出された地点よりも東に約3m離れた地点の水路（SD-1）内からは橋の基礎に用いたモルタルなどが検出されており、神代村中学校のグラウンド造成時に橋を壊して、そのまま水路（SD-1）の中に廃棄したものと考えられる。

戦前から小路地区に居住する古者の話によれば「昭和21年頃に地元の自治会で協力して橋を構築した」とのことであり、今回検出された造構はその時に造られた橋の基礎と考えられる。また、「幼少の頃は、安光小路から道路と橋を通り横町小路へと抜けていた」という話もあり、橋が造られた当時は、安光小路から橋を渡り、横町小路へと抜ける道であったと思われる。

-橋の基礎部分の土層堆積状況-

水路（SD-1）から検出された橋の基礎直上までは神代村中学校グラウンド造成土が堆積していた。グラウンドが造成されたのは昭和24年頃のことである。土層の堆積状況から、グラウンドが造成される直前まで橋は存在し、造成とともに壊されたと考えられる。また、橋の基礎は第V層（第29図）直上面に面していることから、橋を造る直前まで水路内に堆積していた土を（第IV層・第29図）第V層の河川堆積層（第29図）まで掘り込み、橋の基礎の設置を行ったと考えられる。

-南側調査区東側水路（SD-2）護岸石垣-

水路（SD-1）北側護岸石垣から北側に約3m離れた地点からは、水路（SD-1）よりも古い水路（SD-2）護岸石垣が検出された。護岸石垣には幅約40cmの自然石を用いており、1段積みである。検出された護岸石垣の長さは約14mで、護岸石垣の東端からは梯子胴木に用いられたと考えられる松材が検出された。前述（8頁）したが、梯子胴木は石垣の沈下を防ぐために用いるものである。松材は水中に沈めておくとほとんど腐敗せず長持ちすることから、地盤が弱く、石垣が沈下しやすい部分にのみ使用されたと考えられる。根石とよばれる最下段の石と、護岸石垣に伴う裏込め石が確認され、根石は、第29図で示す通り、第V層の河川堆積層の直上面に面し、その基底レベルはほぼ一定（第25図）である。

また、水路（SD-2）護岸石垣に伴う裏込め石は、拳大の自然石を用いており、検出された根石の部分から約80cm上の高さまで積上げられていることが確認された。このことから、水路（SD-2）が造られた当時は、裏込め石が確認された高さまで護岸石垣が積まれていたものと考えられる。水路（SD-2）で検出された護岸石垣は、根石のみ残存している状況から、人為的に壊された可能性も示唆できる。このことから、水路（SD-1）を造る際に、水路（SD-2）の護岸石垣を抜き取り、水路（SD-1）の護岸石垣に転用した可能性も考えられる。

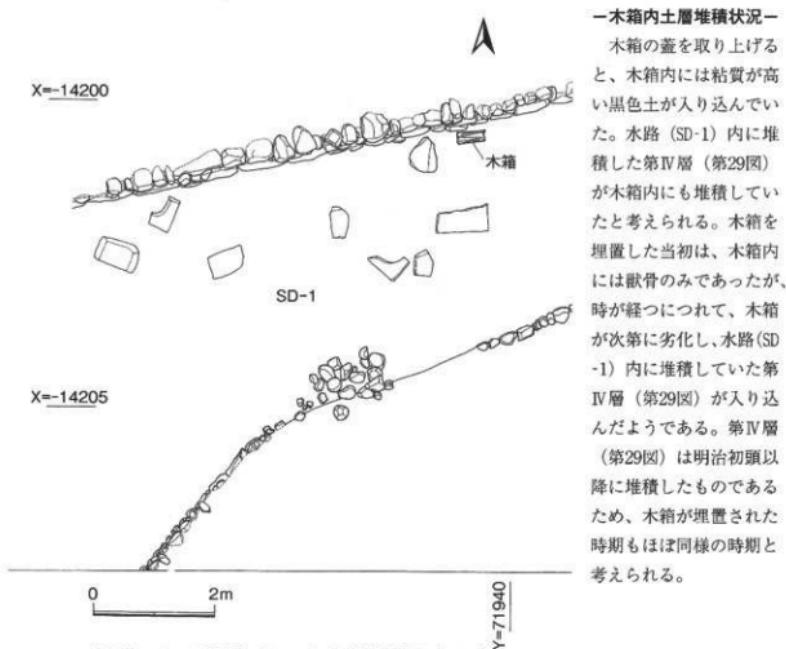
今回検出された水路（SD-2）は嘉永5年（1852）の絵図でも確認できる。その絵図には、安光小路（第2図）から北側にまっすぐのび、一度屈曲してみのつる川へと繋がる水路が描かれている。今回検出された水路（SD-2）の護岸石垣は、この絵図に描かれた水路のものと考えられる。

水路（SD-2）内からは、江戸期末～明治期初頭の土師質土器や碗や皿などの陶磁器などが出土していることから、水路（SD-2）はその時期に造られた可能性が高い。また、水路（SD-1）北側護岸石垣裏込め石検出のレベルから、水路（SD-2）護岸石垣の根石の上位までは、水路（SD-1）北側護岸石垣裏込め石が堆積しており、水路（SD-2）を埋めて水路（SD-1）が造られたと考えられる。水路（SD-1）が造られたのが明治初頭以降になると想われるため、水路（SD-2）から水路（SD-1）へと護岸改修を行った期間は比較的短いものであった可能性が高い。

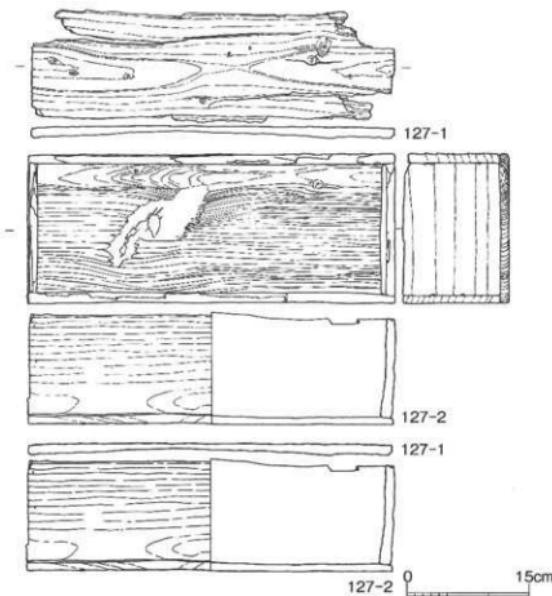
—6区・7区 SD-1内出土木箱—（第26図・第27図）

6区・7区の水路（SD-1）の北側護岸石垣前方からは木箱が検出された。第IV層（第29図）から木箱の蓋の部分が多少壊れた状態で検出され、さらに掘り下げを行ったところ、木箱の身の部分が確認された。身の部分は第V層（第25図、第29図）の河川堆積層を約8cm掘り込んでおり、木箱を埋める際に河川堆積層まで掘り込んで埋置したと考えられる。

木箱の中からは獸骨と考えられる骨が出土していることから、木箱は埋葬するための棺と考えられる。



第26図 6、7区水路（SD-1）木箱検出状況（1/80）



第27図 6, 7区水路 (SD-1) 出土木製品 (木箱) (1 / 6)

— 6区 SD-1出土木製品 — (第27図)

水路 (SD-1) からは木製品 (木箱) が検出された。

127-1は木箱の蓋である。一枚板を利用して作られており、蓋の両端には細い釘穴が2ヶ所みられる。非常に劣化が激しい。

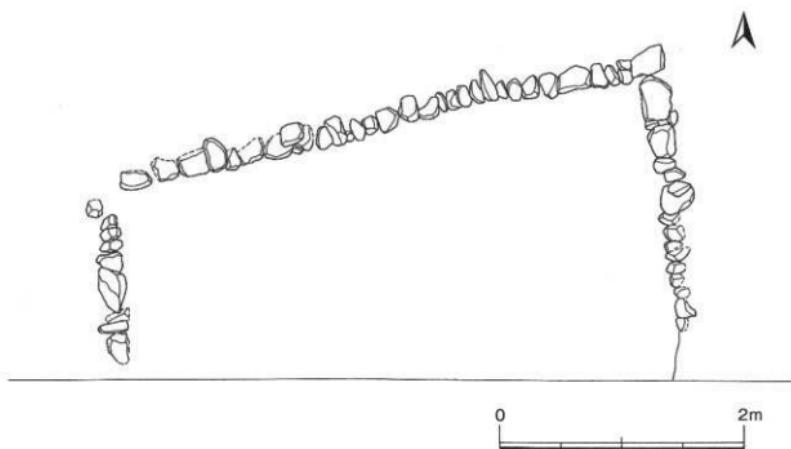
127-2は木箱の身である。長方形を呈し、5枚の板を組み合わせて作られている。板と板が接合する部分には蓋と同様に、細い釘穴がみられる。

箱内からは、獸骨のような骨が出土している。

— 方形状石列遺構 — (第28図)

7区及び10区からは、石列が方形状に並んだ遺構が検出された。石列の石には、拳大～人頭大の自然石を用いており、南北方向に2m、東西方向に約5mを呈し、石列は1段積みである。方形状石列遺構は、第II層である灰褐色粘質土 (第29図) から検出され、石列の下の部分は第V層である河川堆積層 (第29図) の直上に面する。方形状に並んだ石列内からは、ほとんど遺物は検出されなかった。

方形状石列遺構は、水路 (SD-1) の南側護岸石垣よりも南側に約2m離れた地点に存在し、また、水路 (SD-1) 南側護岸石垣が検出された面よりも下層から検出されているため、水路 (SD-1) が造られる以前に造られた遺構と考えられる。水路 (SD-1) が造られたのが明治期と考えられるため、それよりも以前の江戸期末頃に造られたものであろうか。遺物などはほとんど検出されていないため、この遺構の用途などは不明である。



第28図 7, 10区方形状石列遺構 (1/40)

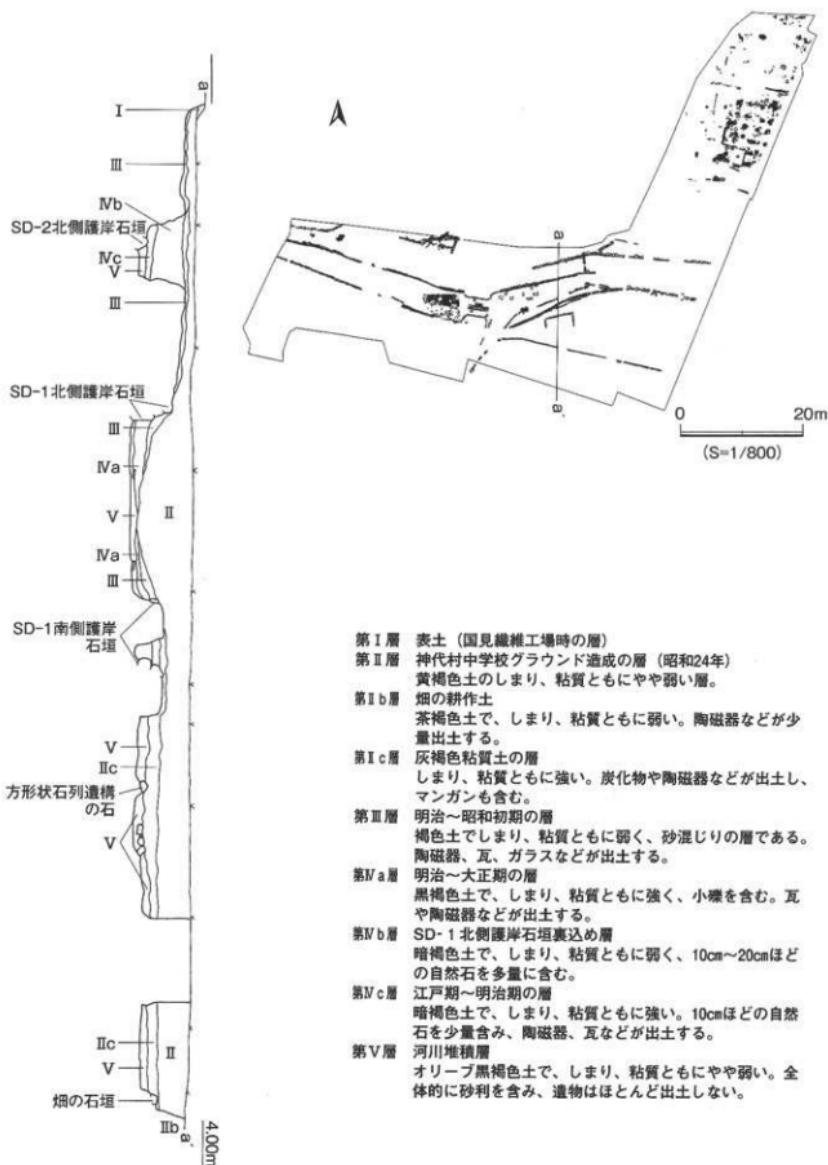
— 1区～15区土層堆積状況 — (第29図)

南側調査区の1区～15区の土層は大きく5層に分けられる。第Ⅰ層は国見織維工場時の層(表層)、第Ⅱ層は神代村中学校グラウンド造成土層(昭和24年造成)、第Ⅲ層は明治期～昭和初期の遺物包含層、第Ⅳ層は江戸期～明治期の層、V層は河川堆積層で、地点ごとに若干の相違は見られる。土層の堆積状況は第29図に示す。

遺構や遺物が検出されるのは、第Ⅱ層から下層である。第Ⅱ層は神代村中学校のグラウンド造成土で、ガラス片や昭和初期の陶磁器片などが検出され、第Ⅱ層下面からは、畑の石垣が検出された(5頁第4図)。第Ⅲ層は明治期～昭和初期の遺物包含層で、ガラス瓶や陶磁器(若干、江戸期の遺物も含む)などが出土し、第Ⅲ層下面からは水路(SD-1)北側護岸石垣と南側護岸石垣の最上段の石が検出された。また、第Ⅳ層は江戸期～明治期の層で、土坑群(15頁第10図)や石列・埋甕(34頁第21図・第22図)や方形状石列遺構(第28図)が検出され、大正期～昭和期の遺物も若干含まれるが、主に江戸期～明治期の土師器や瓦質土器、陶磁器などが出土した。第V層は河川堆積層で、遺構は検出されず、遺物は1点のみ出土している(46頁第31図)。

水路(SD-1, 2)の土層堆積状況も同様である。以下、水路内の土層堆積状況について補足する。第V層の上層に第Ⅳ層が堆積する。第Ⅳ層は、當時水が流れる水路中央部分には殆ど堆積しておらず、水の流れが少ない護岸石垣前方に厚く堆積している。通常、水が勢い良く流れる部分は砂や礫が堆積することが多いが、水路内には粘質や硬さも非常に強い第Ⅳ層が堆積していることから、水路の中は、當時水が勢いよく流れてはいなかったものと考えられる。また、第Ⅲ層は水路北側護岸の上から水路内に斜めに落ちることから、明治期～昭和初期にかけて、水路にゴミを廃棄していたようである。

後世の開発により土層の一部が搅乱されているが、全体的に比較的良好に残存しており、また、遺構の残存も非常に良い(土坑群や埋甕などは削平されている)。その為、水路や土坑群が存在した江戸期～昭和24年頃に神代村中学校のグラウンドとして整備される直前までの変遷を追うことが出来る。



第29図 南側調査区土層図 (1/80)・配置図 (1/800)

-SD-2出土遺物-（第30図）

128は染付磁器の小壺である。疊付きは釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾しながら立ち上がる。外面胴部にはタコ唐草文が描かれ、内面口縁部には四方棒文が描かれる。見込みには二重圓線がめぐり、その中央には環状の松竹梅文が描かれる。19世紀前半の有田焼か。

129は磁器の小壺である。疊付は釉剥ぎである。外面には、高台に二重の圓線、胴部上位と腰部にそれぞれ一重の圓線がめぐり胴部に葡萄唐草文が描かれる。

130は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾し、口縁部は外反する。外面高台に二重圓線、腰部に一重圓線がめぐり、胴部は型紙刷り技法により、竹文、栗文、窓絵文が描かれる。内面見込みに一重圓線がめぐり、中央に貝文が、口縁部には瓔珞文が描かれる。

131は染付磁器の蓋である。口縁部は端反型で、つまみ内部には一重の圓線がめぐり、中央に文字文が書かれる。外面つまみには二重圓線がめぐり、胴部にタコ唐草が描かれる。内面には、見込みに二重圓線がめぐり中央に環状の草花文、山文、鳥文が、口縁部には四方棒文が描かれる。

132は染付磁器の蓋である。外面つまみに二重圓線、胴部に一重圓線がめぐり、文字が描かれる。内面には見込みに一重の圓線がめぐり、中央に文様、口縁部に文字が描かれる。

133は染付磁器の蓋である。口縁部は端反型で、つまみ内・外面には、それぞれ一重圓線がめぐる。外面つまみ下に二重圓線が、胴部に唐草文が描かれる。内面口縁部に波文、見込みに柿文が描かれる。

134は磁器の菓合子の蓋である。口縁部から天井部にかけて内湾する。口縁部内面から天井部下位は釉剥ぎで、外面天井部には染付で「鳥〇〇」と描かれている。

135は瓦質土器の火鉢である。口縁部は回転ヘラ削りにより平らで直線的である。胴部は回転ナデ。

136は染付磁器の大利利である。高台疊付は釉剥ぎであり、砂目痕がみられる。外面高台、胴部下位に一重の圓線がめぐり、胴部中位から上位に竹文が描かれ、頸部下位には上下に二重の圓線がめぐり、その中に山文が描かれている。19世紀後半頃の波佐見焼である。

137は陶器の鉢である。高台は低く、口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。高台内・外面共に砂目痕が残る。見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。武雄焼か。

-SD-1V層出土遺物-（第31図）

138は染付磁器の輪花小皿である。疊付きは釉剥ぎで、高台脇から口縁部まで内湾する。高台には砂目痕がみられ、高台内には「満福」の崩しが描かれる。外面高台には二重圓線がめぐり、腰部と胴部には一重圓線がめぐり、胴部には唐草文が描かれる。内面胴部から見込みには草花文が描かれる。18世紀中葉頃の波佐見焼である。高尾窯などで類品がみられる。

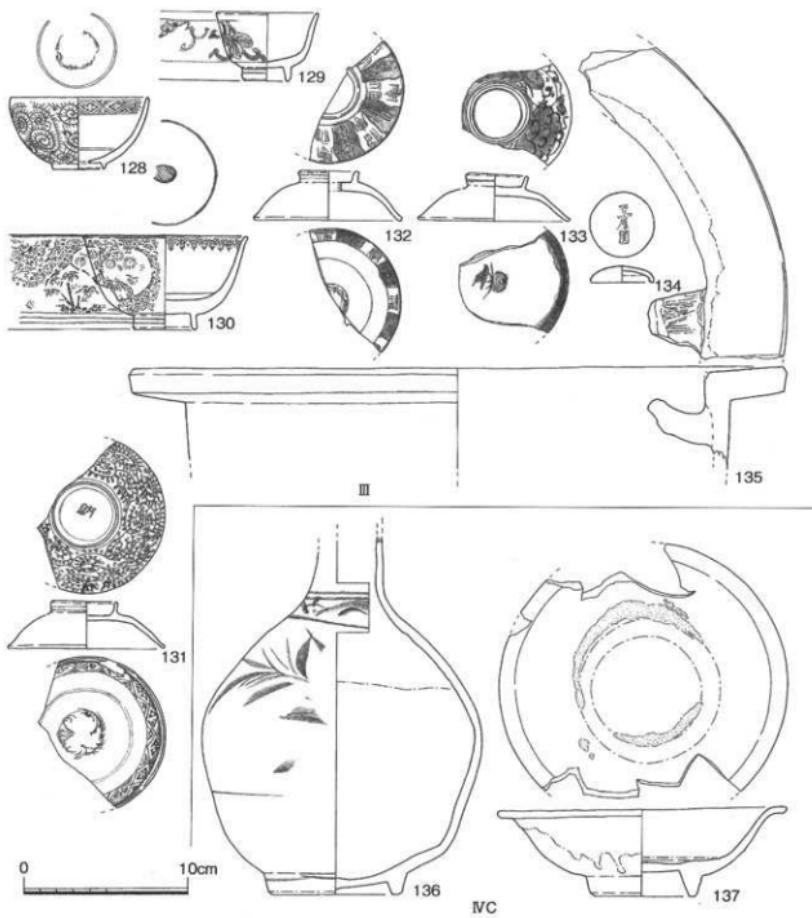
-SD-1IV層出土遺物-（第32図・第33図・第34図）

139は軟質瓦質土器である。底部形態は円形で、底部から口縁部下までやや垂直に立ち上がり、口縁部は玉縁状である。底部から内面胴部中位にかけて煤が付着する。火鉢か。

140は炻器の皿である。底部は上げ底で、底部から胴部上位はやや外反しながら立ち上がり、口縁部は内湾する。口縁部には一重の沈線がめぐり、器壁は底部が厚く、口縁部にかけて薄くなる。

141は染付磁器の小碗である。疊付は釉剥ぎで、外面胴部にはコンニャク印判で花文が押されており、高台には二重圓線がめぐる。18世紀前半の波佐見焼である。

142は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎである。高台脇には二重の圓線が、腰部には一重の圓線がめぐる。外面には菊文のコンニャク印判がみられる。



第30図 SD-2 III層, IV C層出土遺物（土師質土器・磁器・陶器）(1/3)

143は染付磁器の碗である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面高台に二重圓線、腰部に一重圓線がめぐり、胴部に二重網目文が描かれる。18世紀後半の波佐見焼か。

144は色絵磁器の碗である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部まで内湾する。高台内には文字文が、外面胴部にはまつぼっくり文が描かれる。

145は色絵磁器の碗である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて外反する。外面には竹文、松文が描かれている。

146は色絵磁器の小杯である。豊付は釉剥ぎであり、高台脇から腰部までやや斜めに立ち上がり、腰部から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。外面には草文、蝶文が描かれている。

147は磁器の小杯である。高台は低く、高台は削り出しで、豊付には砂目痕が残る。高台脇から腰

部までやや外反し、口縁部は端反型である。

148は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎである。高台脇から丸みを帯びて立ち上がり、口縁部でやや外反する。高台には圓線がめぐり、外面胴部にはタコ唐草文が描かれている。

149は染付磁器の鉢である。疊付は釉剥ぎで、高台脇からゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面には、高台に二重の圓線がめぐり、胴部に雲龍文が描かれている。内面見込みには二重の圓線がめぐり、荒磯文が描かれている。1660年代から1680年代の波佐見焼である。

150は染付磁器の皿である。高台疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がる。外面高台に柳葉文、胴部に三方に配された七宝結び文が描かれている。内面には植物文が描かれている。18世紀代前半から18世紀中葉頃の鍋島焼である。

151は染付磁器の皿である。高台は高く、高台脇からゆるやかに立ち上がり、口縁部で外反する。器壁は底部から口縁部にかけて薄くなる。口縁部は輪花である。外面高台に柳葉文、胴部に花弁唐草文が内面には牡丹文が描かれている。鍋島焼である。

152は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。高台脇から口縁部まで内湾する。外面胴部には草花文が描かれ、蛇ノ目釉剥ぎが施されており、見込みにはコンニャク印判の五弁花文が描かれている。18世紀後半の波佐見焼である。

153は染付磁器の輪花皿である。高台脇から口縁部まで内湾する。蛇ノ目凹高台で、外面高台に二重圓線が、胴部下位に一重圓線がめぐり、胴部には唐草文が描かれている。内面は型紙摺り技法で胴部に区画文、葺文、見込みに繪垣文、その中央に環状の松竹梅文が描かれている。

154は染付磁器の皿である。高台疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。内面には区画された中に文様が描かれている。

155は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。全体的に貫入がみられ、内面胴部に竹文、俵文、崩れた岩文、見込みに二重圓線がめぐり、中央に環状の竹文が描かれている。口縁部は輪花である。

156は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。内面には草文が描かれ、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。19世紀中葉の波佐見焼である。

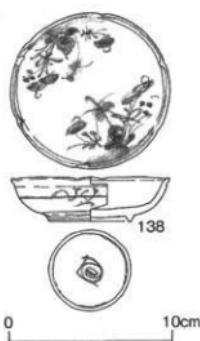
157は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、全体的に貫入がみられる。内面には草文が描かれ、見込みには蛇ノ目釉剥ぎが施されている。内面には炭化物とサビが付着する。

158は染付磁器の皿である。高台は蛇ノ目凹型で、口縁部は玉縁状を呈す。内面見込みに團線と花唐草文、胴部には捻文が描かれている。見込みには付着物と三足ハマ痕が残る。

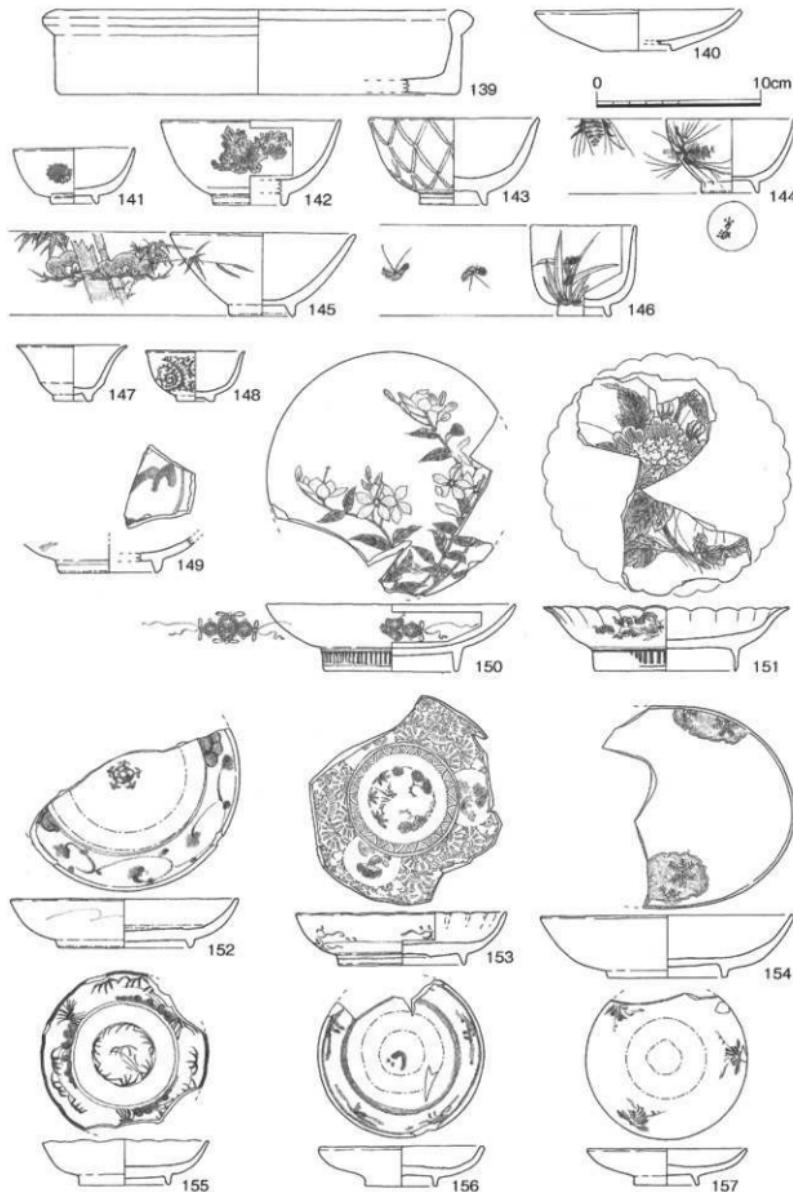
159は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面胴部には折松葉文が、内面には菊唐草文が描かれ、見込みには五弁花文のコンニャク印版がみられる。18世紀中葉～18世紀後半の波佐見焼である。

160は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎであり、砂目痕が残る。口縁部は玉縁状を呈し、内面にはよろけ斜格子文が描かれている。19世紀前半の波佐見焼である。

161は染付磁器の仏飯器である。底部は削り出で、坏部は深く、颈部から口縁部にかけて垂直に立ち上がる。坏部外には梅文が描かれている。



第31図 SD-1 V層
出土遺物 (磁器)
(1/3)



第32図 SD-1 IV層出土遺物（瓦質土器・炻器・磁器）(1/3)

検出された構造と遺物

47

いる。

162は磁器の紅皿である。高台は非常に低く小さい。型押し成形技法で貝殻状を呈す。紅を入れる内面のみ施釉され、外面は無釉である。部分的にナデもしくは磨耗により型押しが消えている箇所がみられる。

163は磁器の紅皿である。高台は非常に低く小さい。輪花状を呈し、型押し成形技法によるものとみられる。紅を入れる内面のみ施釉される。

164は染付磁器の瓶である。疊付は釉剥ぎで、外面は草花文が描かれる。

165は色絵磁器の水滴である。底面には布目跡が残る。器形は四角形をなし、底部から上部まで垂直に立ち上がる。上面には型押し成形で花文が陽刻され、上面の角隅には2ヶ所水差し孔を設ける。

166は染付磁器の水滴である。板作り成形で、底部は無釉、背面と内面には布目痕がみられる。長方形を呈し、表面には鶴と雲の陽刻あり。表面中央と角には穿孔が2つあり。

167は磁器の人形である。型押し成形で底部は釉剥ぎである。頭部は欠損している。

168は磁器の人形である。型押し成形で、底面は釉剥ぎである。軍人を表現したものであり、頭部は欠損している。19世紀前半の有田焼か。

169は磁器の人形である。型押し成形で、犬の上に人が乗っている様子の人形であるが、頭部が欠損しており、全容は把握できない。犬の足裏が底部となり、砂目痕が残る。19世紀前半の有田焼か。

170は青磁の鉢である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾し、口縁端部は折線状である。内面には桜文、馬文が描かれている。高台内には円の中に「有田」の銘がみられる。

171は陶器の皿である。高台は削り出しである。高台脇から口縁部下まで内湾し、口縁部は外反する。高台疊付きには精砂粒が溶着し、内面見込みは蛇目釉剥ぎである。武雄焼か。

172は陶器の皿である。高台は削り出しである。高台脇から口縁部下位まで内湾し、口縁部は端反型である。内面見込みは蛇目釉剥ぎで、鉄釉を塗布した後に灰釉。器壁は高台部分が最も厚い。

173は陶器の碗である。高台は削り出しで、疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。内外面ともに貫入がみられる。外面には、草文、鶴文、岩文が描かれている。

174は京焼風陶器の碗である。高台は削り出しで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面胴部には五重の塔が描かれ、内面見込みには貝文が描かれる。

175は木製品の下駄である。角型の連歯下駄。台部は方形で、前壺、横緒孔がある。台部の下には歯が設けられている。歯は前後に「ハ」の字状に開く。器面は剥落が若干みられる。

176は木製品の一木下駄である。丸型の削り下駄。一枚板を加工して作られている。つま先部分には鼻緒を通す穿孔あり。

177は木製品の箸である。中央あたりに折れて接合したと思われる痕がみられる。

178は木製品の箸である。表面には何も塗布されていない。箸先は折れている。

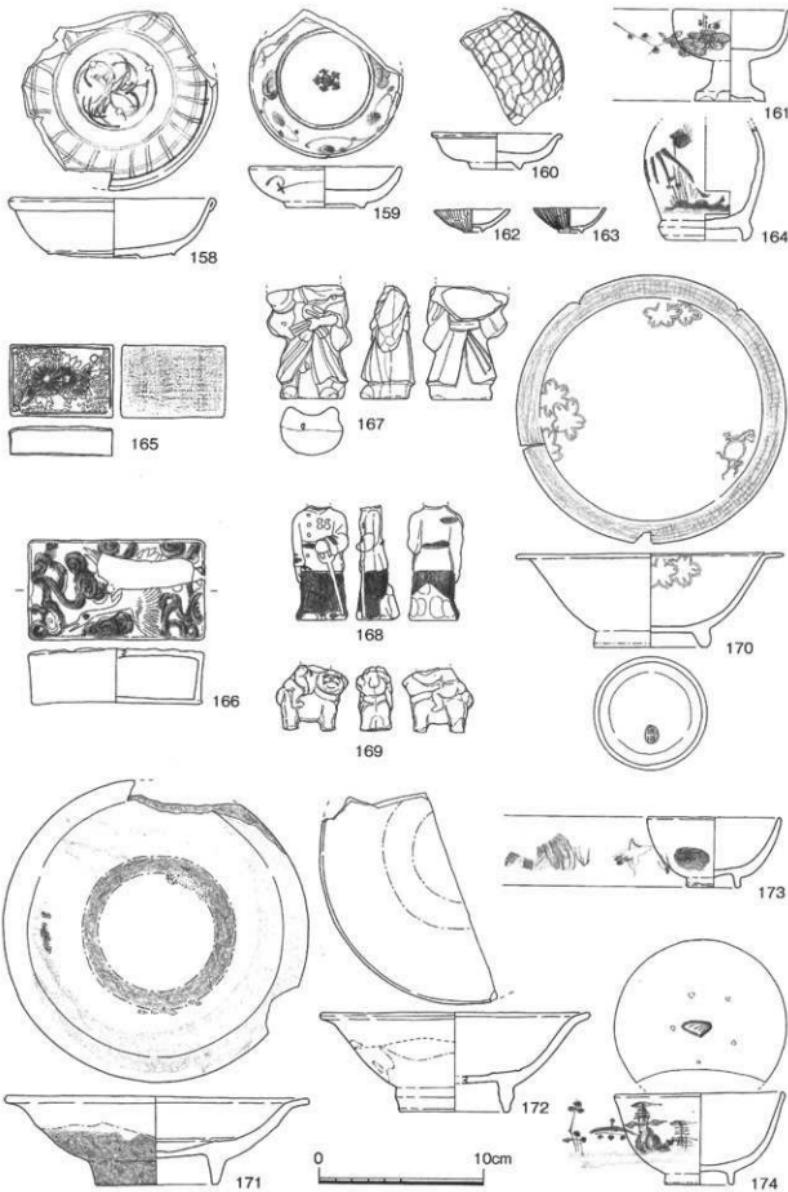
179は木製品の蓋と思われる。半分は欠損しているが、本来は円形状のものである。

180は木製品のしゃもじである。先端部分と裏面全体にはサビの様なものが付着している。

-SD-1Ⅲ層出土遺物-（第35図・第36図・第37図・第38図・第39図・第40図）

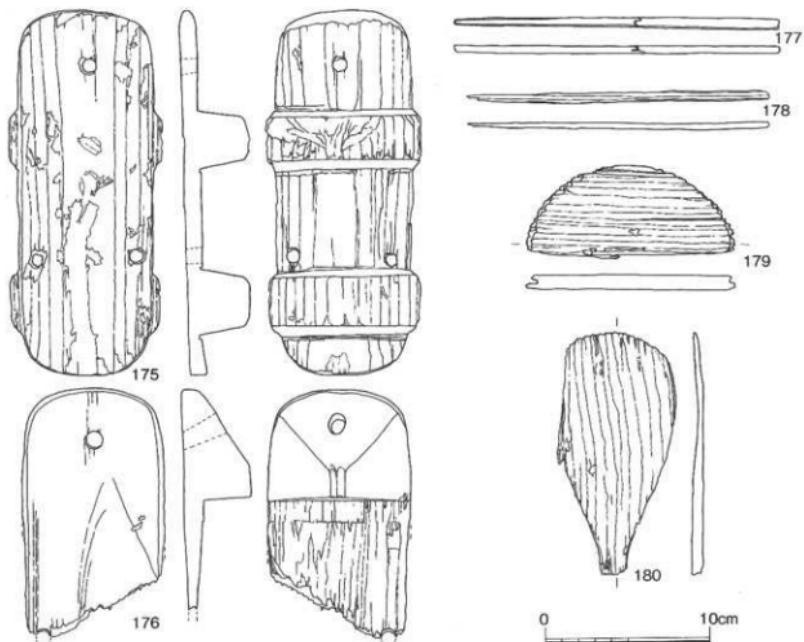
181は色絵磁器の小碗である。疊付は釉剥ぎである。外面には銀杏文、蝶文が描かれている。

182は染付磁器の碗である。高台脇から口縁部まで内湾する。疊付は釉剥ぎで、外面には桐の葉文を円で囲ったものと囲っていないものが交互に描かれている。腰部に一重の圏線が、高台には二重の圏線がめぐり、高台内には角柱無しの渦巻文が描かれている。



第33図 SD-1 IV層出土遺物（磁器・陶器）（1/3）

検出された遺構と遺物



第34図 SD-1 IV層出土遺物（木製品）（1 / 3）

183は染付磁器の碗である。脛付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。器壁は全体的に厚い。外面に松文が描かれている。

184は染付磁器の碗である。脛付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部まで内湾する。外面には、口縁部に一重圓線が、高台に三重圓線がめぐり、菊文が3ヶ所描かれている。内面には、口縁部に二重圓線がめぐり、見込みには二重圓線と中央にコンニャク印版による五弁花文がみられる。

185は染付磁器の碗である。脛付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部まで内湾する。外面高台に二重圓線がめぐり、胴部は型紙摺り技法で、区画文様には紗絞形文が、その間には草花文が描かれる。内面口縁部に環珞文が描かれ、見込みには一重圓線がめぐり、中央には環珞文が描かれる。

186は染付磁器の碗である。脛付は釉剥ぎで、口縁部は端反型である。外面高台に二重圓線がめぐり、胴部には型紙摺り技法で区画文内に花文、区画外に青海波文が描かれる。内面口縁部に環珞文が、見込みには環状の松竹梅文が描かれる。

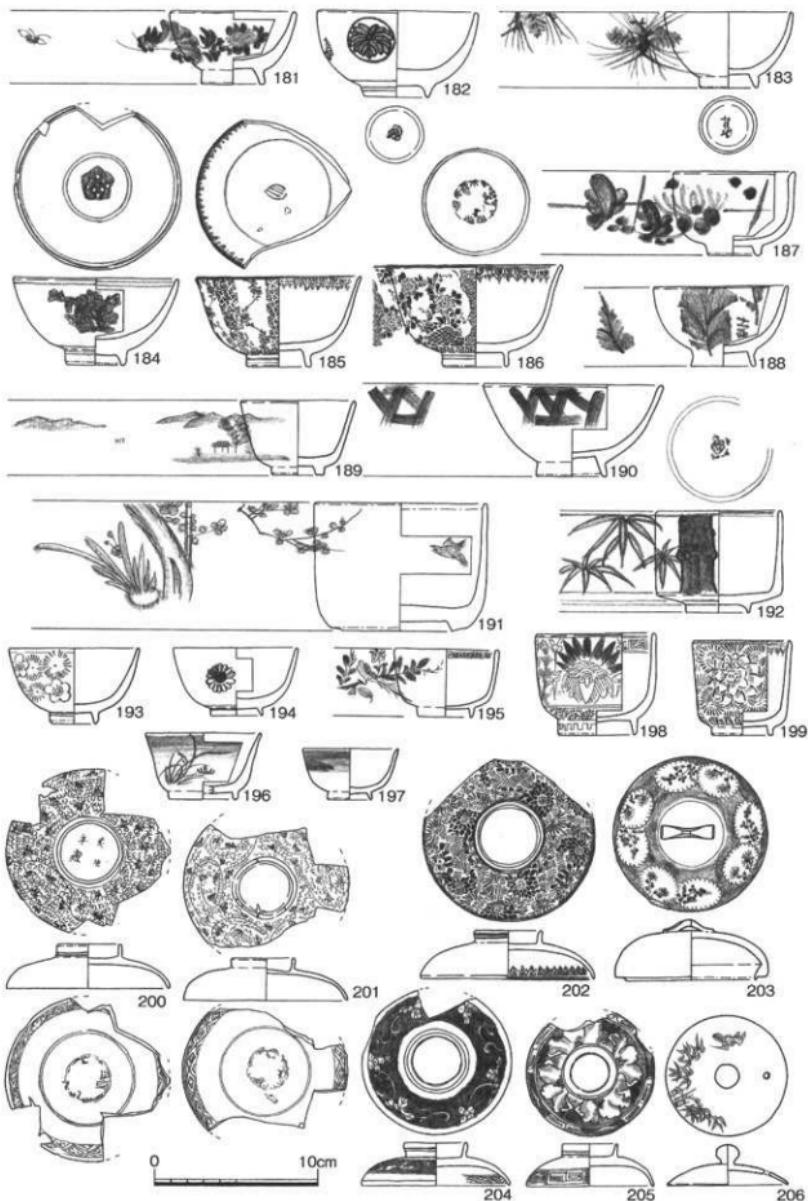
187は色絵磁器の小碗である。脛付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。外面には菊文が描かれている。

188は染付磁器の小碗である。脛付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。外面には葉文と文字文が描かれる。

189は染付磁器の小坏である。脛付は釉剥ぎで、高台は削り出しである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面胴部には東屋山水文が描かれている。

190は染付磁器の碗である。脛付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面にはサビの付着がみられ、格子文が描かれている。

191は色絵磁器の段重である。上げ底で、高台と口縁部内面は釉剥ぎである。脛付には砂目痕が残



第35図 SD-1 Ⅲ層出土遺物（磁器）(1/3)

検出された遺構と遺物

る。腰部から口縁部にかけて垂直に立ち上がり、口縁部内面は上の段と重ねられるように内側に傾斜している。外面には岩文、草文、梅文、鳥文が描かれている。

192は染付磁器の筒型碗である。豊付には砂目痕が残る。腰部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。内面口縁部に二重圓線、見込みには二重圓線がめぐり中央に五弁花文が描かれる。外面には竹文を描き、胴部・腰部・高台脇それぞれに圓線をめぐらせる。18世紀後半の波佐見焼である。

193は染付磁器の小碗である。高台脇付は削り出しで、砂目痕が残る。外面には型紙摺り技法で梅文が描かれている。

194は染付磁器の碗である。高台脇付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。外面高台脇に二重圓線、腰部に一重圓線がめぐり、胴部にコンニャク印判の菊文が3つ描かれている。18世紀前半の波佐見焼である。

195は染付磁器の小坏である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部までやや垂直に立ち上がる。外面には、花鳥文が内面には雷文が描かれている。

196は染付磁器の小坏である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から内湾し、口縁部は端反型である。内面には貫入がみられ、外面には草文が描かれている。

197は染付磁器の小坏である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。外面には、胴部から口縁部にかけて幅広の圓線が描かれている。

198は染付磁器の碗である。豊付は釉剥ぎで、腰部から口縁部にかけてやや垂直に立ち上がる。内面口縁部には雷文、外面には高台に櫛齒文、腰部に二重の圓線とタコ唐草文、胴部に文様が描かれる。

199は染付磁器の小坏である。豊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部までやや垂直に立ち上がる。型紙摺り技法で、外面高台脇には一重圓線がめぐり、胴部に花文、腰部に簡略された連弁文様、口縁部内面には瓔珞文が描かれる。

200は染付磁器の蓋である。つまみ豊付は釉剥ぎで、外面つまみ脇に二重圓線、つまみ内に一重圓線がめぐり、つまみ内には文字文、胴部には唐草文が描かれる。内面見込みに二重圓線がめぐり、中央に環状の松皮菱文、口縁部に四方攢文が描かれる。つまみ内には成化年製の文字が描かれる。

201は染付磁器の蓋である。つまみ豊付は釉剥ぎで、口縁部からつまみにかけて内湾する。外面には唐草文、内面口縁部には四方攢文、見込みには二重圓線の中央に環状の松皮菱文が描かれる。

202は染付磁器の蓋である。つまみ豊付は釉剥ぎで、型紙摺り技法により、外面胴部には花文などが描かれ、内面口縁部に瓔珞文が描かれれる。

203は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎで、砂目痕が残る。口縁部からつまみにかけて内湾する。外面中央には二重圓線がめぐり、胴部には円の中に花文と草文が描かれる。

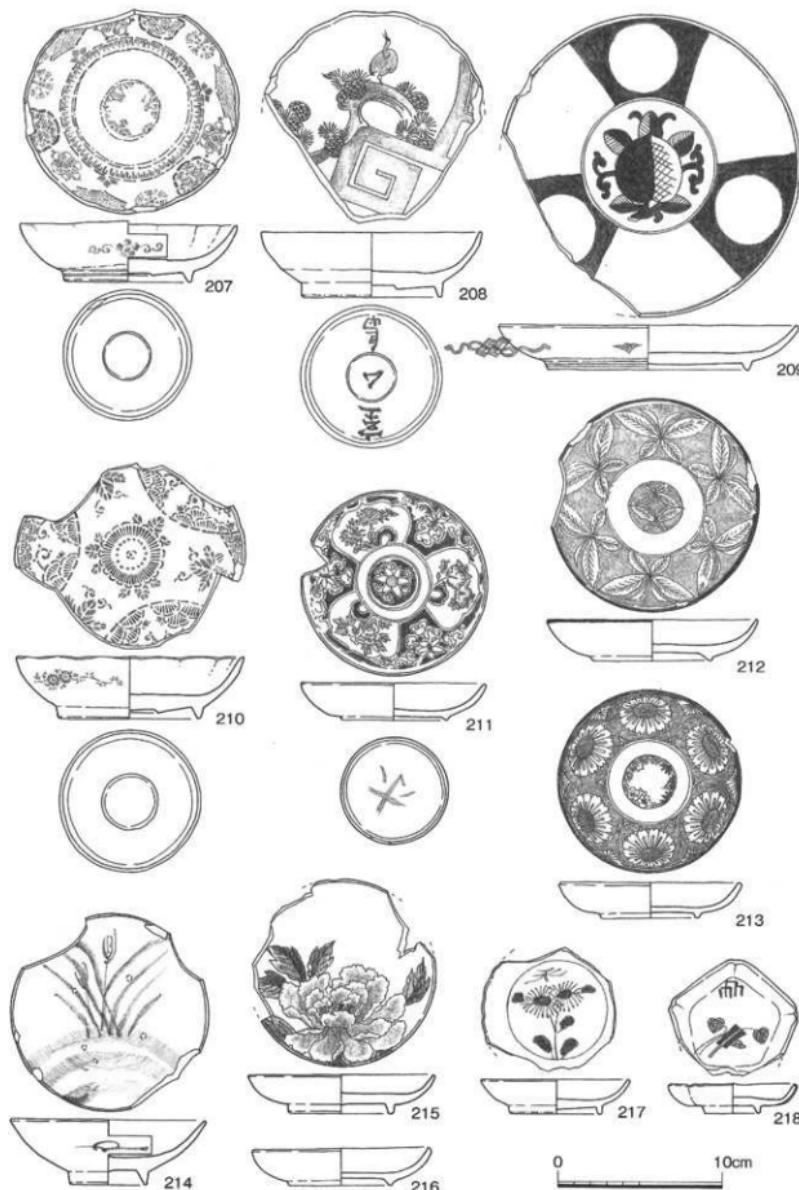
204は染付磁器の蓋である。つまみ豊付は釉剥ぎで、つまみ内に一重圓線がめぐり、外面には二重圓線がめぐる。外面には葡萄文が、口縁部内面には檜垣文が描かれている。

205は染付磁器の蓋である。つまみ豊付は釉剥ぎで、つまみの内面には一重圓線、外面には二重圓線がめぐる。外面には草花文、雷文が描かれる。

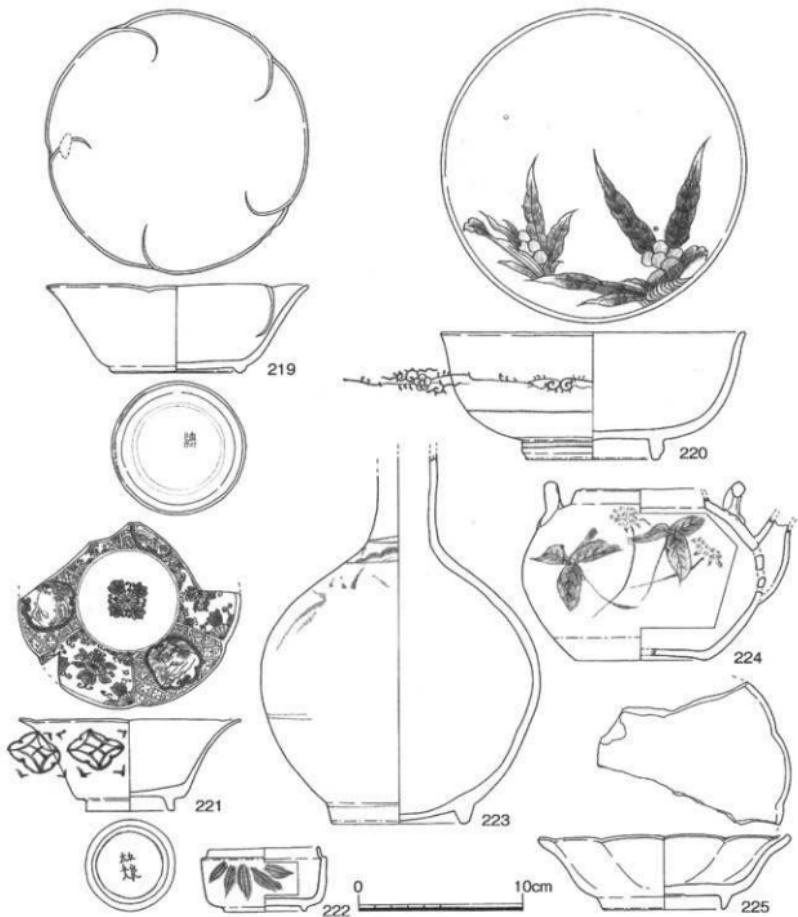
206は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎで、外面には竹文、鳥文が描かれる。つまみ下部にはサビの付着がみられ、天井部に蒸気孔が1つ。

207は染付磁器の輪花皿である。蛇ノ目凹型高台で、高台脇から口縁部にかけて内湾する。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、型紙摺り技法により、外面高台に二重圓線がめぐり、胴部には花文が描かれている。内面胴部に花文、菱文、見込み中央には環状の松竹梅文が描かれる。

208は染付磁器の皿である。蛇ノ目凹型で、高台脇から口縁部にかけて内湾する。高台内面には「室ム島」と墨書きで書かれ、内面には型紙摺り技法により、鶴文、松文が描かれる。



第36図 SD-1 Ⅲ層出土遺物（磁器）（1/3）



第37図 SD-1 III層出土遺物（磁器）（1/3）

209は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面高台脇に二重圓線、腰部に一重圓線がめぐり、胴部には宝巻文が描かれる。内面見込みに二重圓線がめぐり、中央に桃文が、胴部には、台形の中に円文が描かれる。

210は染付磁器の輪花皿である。高台脇から口縁部にかけて内湾する。蛇ノ目凹型高台で、外面高台に二重圓線、胴部下位に一重圓線がめぐる。型紙摺り技法で、胴部には菊文が描かれる。内面胴部に円形の区画文、その周間に桐文、見込みには菊文が描かれる。

211は染付磁器の皿である。高台脇から口縁部にかけて内湾し、疊付きは釉剥ぎであり、砂目痕が残る。型紙摺り技法により、内面には如意形の区画文、菊文、牡丹文、唐草花文が描かれる。

212は色絵磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。型紙摺り技法

により、内面には蝶を模造した葉文が描かれている。

213は色絵磁器の皿である。高台疊付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。型紙摺り技法により、内面胴部には二重楕円で囲まれた花文、見込みには環状の松竹梅文が描かれる。

214は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面には岩波文、内面にはカキ日を施した後に草文が描かれる。見込みには足付ハマ痕が5つみられる。

215は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇には沈線がめぐり口縁部にかけて内湾する。内面は型紙摺り技法で花文が描かれている。

216は磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。高台脇から口縁部にかけて内湾する。

217は染付磁器の輪花皿である。疊付は釉剥ぎで、口縁部には線錆が施される。内面には、一重圓線がめぐり、花文、蜻蛉文が描かれる。

218は染付磁器の小皿である。形態は六角形を呈し、疊付は釉剥ぎで、内外面の一部には貫入がみられる。内面には扇子文、ホオズキ文、源氏香文が描かれる。

219は磁器の輪花鉢である。型打ち成形で、疊付は釉剥ぎである。

220は染付磁器の鉢である。疊付は釉剥ぎである。外面には、高台に二重圓線が、高台脇と腰部には一重圓線がめぐり、胴部には果実文、葉文が描かれる。

221は染付磁器の輪花鉢である。型打ち成形で、疊付は釉剥ぎである。高台内には記銘がみられる。外面高台には二重圓線が、腰部には一重圓線がめぐり、胴部には花文が描かれている。内面胴部には矩形の区画文内に花文や山水文が描かれる。見込み中央には十字花文が描かれる。有田焼か。

222は染付磁器の小物入れである。疊付は釉剥ぎで、外面胴部には笛文が描かれる。

223は染付磁器の大利である。疊付は釉剥ぎで、胴部中位に最大径を計る。外面高台に一重圓線、胴部下位に二重・上位に一重圓線、頭部付け根に二重圓線がめぐり、胴部には笛文、頭部付け根には岩文、草文が描かれる。疊付には砂目痕が残る。18世紀後半～19世紀の波佐見焼である。

224は色絵磁器の急須である。取手と注口部分は貼り付けである。外面には紫陽花文が描かれる。

225は青磁の輪花鉢である。蛇ノ目凸形高台で、高台内の蛇ノ目部分には鉄泥が塗布され、その部分に磁器製のチャツを用いた痕がみられる。波佐見焼か。

226は陶器の壺である。底部は回転糸切りで、内外面の口縁部のみ鉄釉を2度掛けしている。

227は陶器の壺である。底部は回転糸切りで、平底である。底部以外は外面内面ともに施釉される。

228は陶器の注口付瓶である。高台は削り出しで、胴部中位に最大径を測り、胴部上位に注口が付く。外面は頭部から高台、内面は頭部から胴部中位にかけて鉄釉を施す。

229は陶器の鉢である。疊付は釉剥ぎで、肩部は張る。全体的に貫入がみられ、煤が付着する。

230は陶器の小皿である。疊付は釉剥ぎである。見込みには足付ハマ溶着痕がみられる。内面見込みに5つの花文の印花が描かれその周囲を小さな円文で囲む。

231は陶器の鉢である。高台は削り出しで、口縁部は玉縁状を呈す。内面見込みには砂目痕が残る。

232は陶器の擂鉢である。高台は削り出し、口縁部は玉縁状で、注口が成形されており、内面には擂目を施す。擂目は幅広の施文具で丁寧に機描きされている。

233は陶器の調味料入れと思われる。豚を型取ってあり、型押し成形である。頭頂部には5つの穿孔が開き、腹部にも1つの穿孔がある。耳の内面・背中・尻尾には色が塗られている。

234は大工道具の玄翁である。物を叩く作業に用いたもので、叩く部分が鉄製、柄の部分は木製。

235は木製品の二次加工品であると思われる。もともと板状のものをナイフ形に削り、使用されたと考えられる。用途は不明。表皮が剥がれている部分もみられ、裏面には溝が掘られている。

236は木製品の一木下駄である。角型の刺り下駄。子供用と思われる。前壺と横縫孔が1つみられるが、本来ならば横縫孔が2つ開けられていたと考えられる。歯の部分はすれている。

237は木製品の下駄である。一枚板を加工して作られている。前壺と横縫孔があり、どれもキリの様な道具で開けられたと思われる。地面に直接面するところは、板がすれていために砂利が入る。底面にはサビや炭化物の付着がみられる。子供用の下駄と思われる。

238は赤玉ポートワインの瓶である。いかり肩で、栓の形態はコルク栓である。胴部下位には、「BOTTLED&GUARANTEED BY KOTOBUKIYA CO.,LTD.」、肩部には「AKADAMA PORT WINE」、底部には「B」と陽刻する。赤玉ポートワインは明治32年に開業した鳥井商店（寿屋）が、明治40年に発売した。

239はキリンビールの瓶である。なで肩で栓の形態は王冠栓である。肩部には「標商B録登 ルーピンリキ」、胴部下位には「ルーピンリキ 標商B録登」、底部には「2の下に一」の陽刻がある。昭和31年に「@マーク」が制定されているが、出土した瓶にはみられないため、大正期から昭和31年までに製造されたものである。キリンビールは明治21年にジャパン・ブルアリーカンパニー（明治18年設立、明治40年に麒麟麦種株式会社、現在キリンホールディングス株式会社）から発売された。

240は瓶である。なで肩で、底部中央に○の中に「B」の陽刻がみられる。栓の形態は王冠栓である。胴部には「BOTTLED BY TEIKOKU BREWERY Co.,LTD. MOJI, JAPAN.」の陽刻がみられる。

241は三ツ矢サイダーの瓶である。なで肩で、栓の形態は王冠栓である。底部内には「5：2」、外面胴部下位には「登録＜商標＞商標日本麦種鶴泉株式会社」の陽刻がみられる。大正末～昭和初期の瓶。

242は牛乳瓶である。なで肩で、栓の形態は、紙製フード。外面胴部中位に「島原 SHIMARAKU」、胴部下位に「正味200CC 入」「要冷蔵」「島原地方酪農」「TEL. (2)4334」が印刷され、「@200CC」「I I I I' ○に H 04」が陽刻される。「○に H」は広島硝子工業（株）（平成元年山村硝子と合併）の昭和21年から昭和35年頃の固有記号である。島原牛乳は島原酪農株式会社で昭和22年から生産されているため、出土した瓶は、昭和22年から昭和35年頃のものと考えられる。

243は衣料用処理剤の瓶である。いかり肩で、表面には桜の絵の中央に「保」と「日本化学工業所 タモツ液本舗」が陽刻される。ベンジンで落ちにくい汚れなどをオホト染み抜きの薬の瓶である。日本科学工業所は大正9年に創立された会社で、現在の株式会社日本科学工業所である。

244は薬品瓶である。いかり肩で栓の形態はコルク栓である。外面に陽刻などはみられない。

245は薬品瓶である。底部から肩部まで垂直に立ち上がる。肩部はいかり肩である。

246は目薬瓶である。底部中央に「田○」の陽刻がみられる。いかり肩で、栓の形態はコルク栓である。外面には「大学目薬」、「参天堂薬房」と陽刻される。参天堂薬房は現在の参天製薬である。胴部には、箱に入れる時にスポイドを収める為の太い溝がみられる。

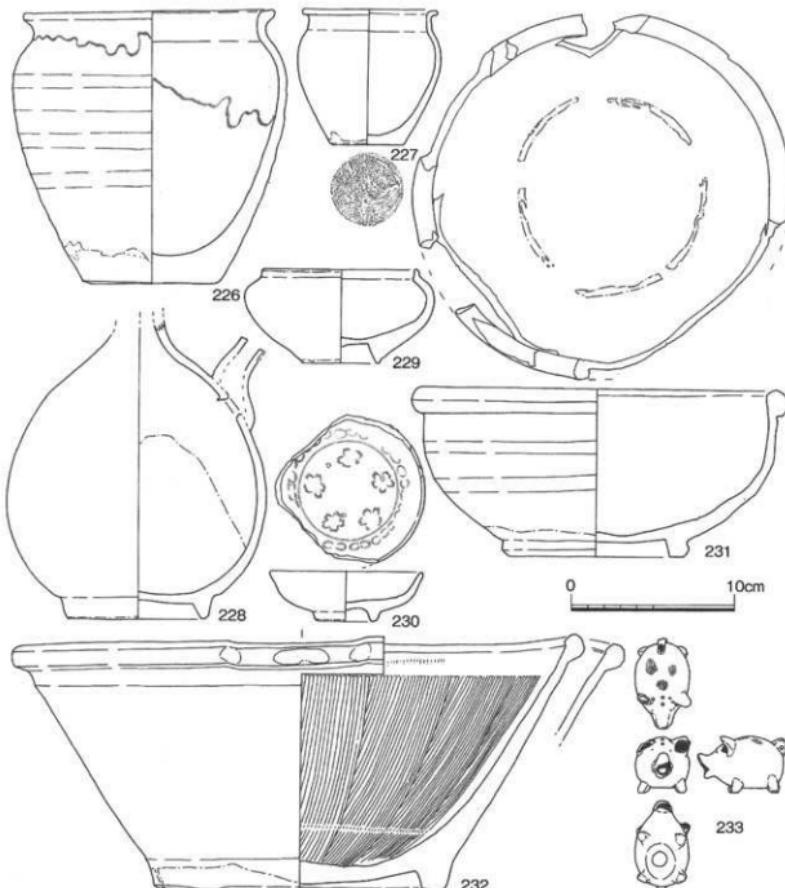
247は目薬瓶である。底部は丸底で、胴部は筒型を呈す。栓の形態はスクリュー栓で、外面胴部には斜位の線と「組合目薬」が陽刻されている。底部には「桜」と文字が陽刻される。

248は軟膏瓶である。底部中央には「一」の陽刻がみられる。いかり肩で、ガラスの蓋がつく。外面には「内用 薬精」の陽刻がみられる。

249は瓶である。いかり肩で栓の形態はコルク栓である。焼成時に口縁部が変形したと思われる。

250は染料瓶である。いかり肩で、栓の形態はスクリュー栓である。外面には「みや古染」と目盛りの陽刻がみられる。

251は染料瓶である。いかり肩で栓の形態はスクリュー栓である。外面には「みや古染」と目盛り



第38図 SD-1 Ⅲ層出土遺物(陶器)(1/3)

の陽刻がみられる。

252は薬瓶である。いかり肩で、栓の形態はコルク栓である。胴部には、「美頬水」と陽刻してある。桃谷順天館のにきびの薬である。

253は化粧クリーム瓶である。栓の形態はスクリュー栓で、外面中央にはラベルを貼る部分がみられる。体部は17ヶ所カットしており梢円形である。

254は化粧クリーム瓶である。栓の形態はスクリュー栓で、円筒形である。胴部には梢円形と列柱状のデザインがみられる。

255は瓶である。底部中央部分は正方形が陰刻されている。いかり肩で、栓の形態はコルク栓である。全体的に気泡が見られ、胴部から頭部下まで模様が陽刻されている。

256はインク瓶である。上げ底で首部が中心から偏る。胴部は円形で、栓の形態はコルク栓である。

257は磁器の蓋である。外面中央に草が描かれその周囲には「NORINORINORI」と陽刻されている。

-IV層・III層出土遺物- (第42図)

258は土師皿である。底部は回転糸切りで、口縁部に黒色のタール状のものが付着しており、灯明皿であることがわかる。外内面ともに横位ハケとナデである。

259は染付磁器の香呂である。腰部が強く張り出す。高台内は蛇ノ目釉剥ぎで、見込みは削りである。内面は口縁部に帯状に波状文が描かれている。外面は飛龍文が描かれている。有田焼か。

260は磁器の紅皿である。型押し成形で、内外面胴部は施釉され、外面口縁部は薬垂れが残る。

261は磁器のミニチュア碗である。内面および口縁部外面は施釉である。ままごと道具と思われる。

262は土師皿である。底部は回転糸切り後、墨で「〇」が描かれる。外面胴部は、横位ケズリ、ナデ、口縁部はケズリ。内面口縁部から底部にかけて横位ケズリ、底部内面ナデ。口縁部の一部分に煤の付着がみられる。灯明皿か。

263は土師皿である。底部は回転糸切りで、口縁部は若干だが外反する。

264は土師皿である。底部は回転糸きり後、ナデ。底部から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。

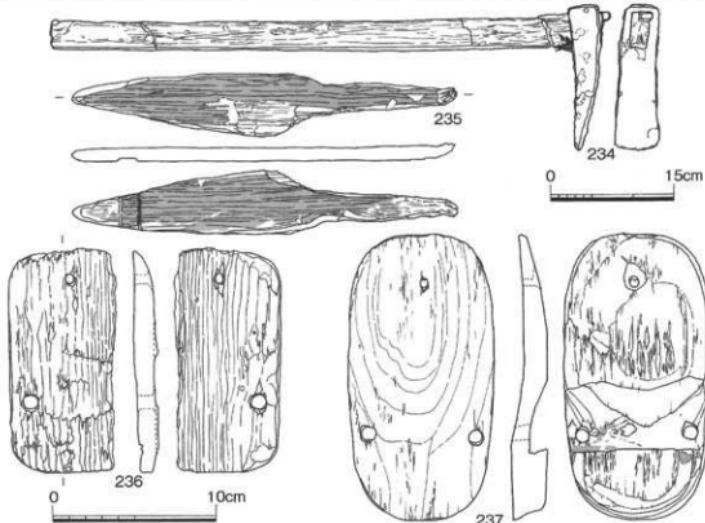
265は土師皿である。内面から外面胴部にかけて回転ナデ、底部は回転糸切りである。

266は土師皿である。内外面胴部にかけて回転ナデ、底部は回転糸切り離しである。

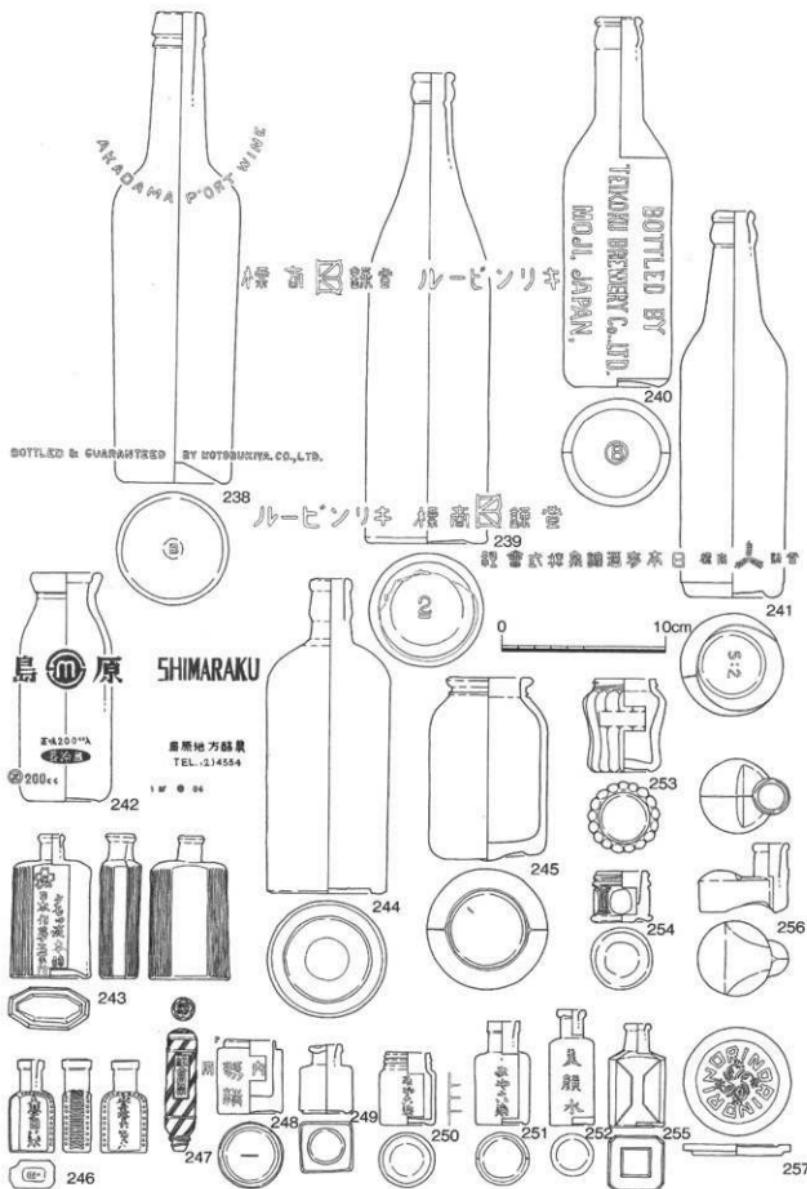
267は土師皿である。内外面胴部にかけて回転ナデ、底部は回転糸切り離しである。

268は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、高台内に一重圏線、高台脇に二重圏線、腰部に一重圏線がめぐる。外面には文様が描かれる。波佐見焼である。

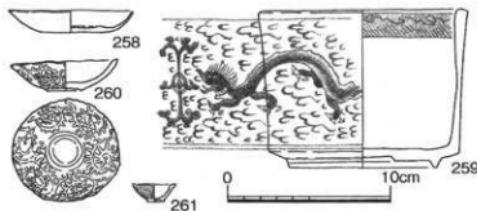
269は染付磁器の碗である。高台は低く、疊付きは釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面胴部には唐草文が描かれ、内面口縁部は四方擗文が描かれている。見込みには二重圏線が



第39図 SD-1 Ⅲ層出土遺物 (木製品) (1/3・1/6)



第40図 SD-1 III層出土遺物（ガラス製品）(1/3)



第41図 SD-1出土遺物（土師器・磁器）(1/3)

描かれ、その中央には環状の松竹梅文が描かれている。

270は染付磁器の碗である。高台は低く、脛付は釉剥ぎである。外面には高台脇に二重圓線、腰部に一重圓線がめぐり、胴部には宝相華文が描かれる。底部内面には一重圓線がめぐり、中央に崩れた渦福の銘が描かれている。全体的に貫入がみられる。

271は染付磁器の碗である。脣付は釉剥ぎで、外面に花文が描かれている。胴部には二重網目文が削筆によって描かれる。内面には、見込みに二重圓線がめぐりその中に菊花文、胴部に網目文が描かれている。高台内には渦福の銘がみられる。18世紀後半の波佐見焼である。

272は染付磁器の碗である。脣付は釉剥ぎで、外面には花文が描かれている。

273は染付磁器の碗である。脣付は釉剥ぎで、砂目痕が残る。外面には篆文が描かれている。18世紀後半～19世紀前半の波佐見焼である。

277は染付磁器の鉢である。脣付は釉剥ぎで、全体的に貫入がみられる。外面高台には一重圓線がめぐり、胴部下位には雲龍文が描かれる。内面見込みに二重圓線がめぐり、その中には荒磯文が描かれる。「荒磯文」とは、波間から魚が飛び跳ねる姿を表した文様で、もともとは中国のデザインである。1660年代～1680年代の波佐見焼である。

278は磁器の小壺である。脣付きは釉剥ぎで、外面には草文？が描かれる。

279は磁器の玩具カップである。底部無釉で、内外面胴部まで釉掛けが施される。

280は磁器の紅皿である。型押し成形である。外面はタコ唐草文の陽刻である。

281は磁器の仏飯器である。底部は削り出し、脣付に化粧掛けを施す。外面には二重圓線がめぐり、斜格子文が描かれている。

282は陶器の輪花小鉢である。高台は削り出しである。外面には柳文が描かれている。施釉部分には全体的に貫入がみられる。

283は陶器の碗である。高台は削り出しで、全体的に貫入が、外面には花文、草文が描かれている。

284は陶器の小壺である。底部は回転糸切りである。全体的に器壁が厚い。

285は京焼風陶器の碗である。高台は削り出しで、外面には不明文が描かれている。見込みは蛇目釉剥ぎで砂目痕が残る。

286は土師皿（墨書）である。底部は比較的平坦で、回転糸切りである。全体的にナデを施す。

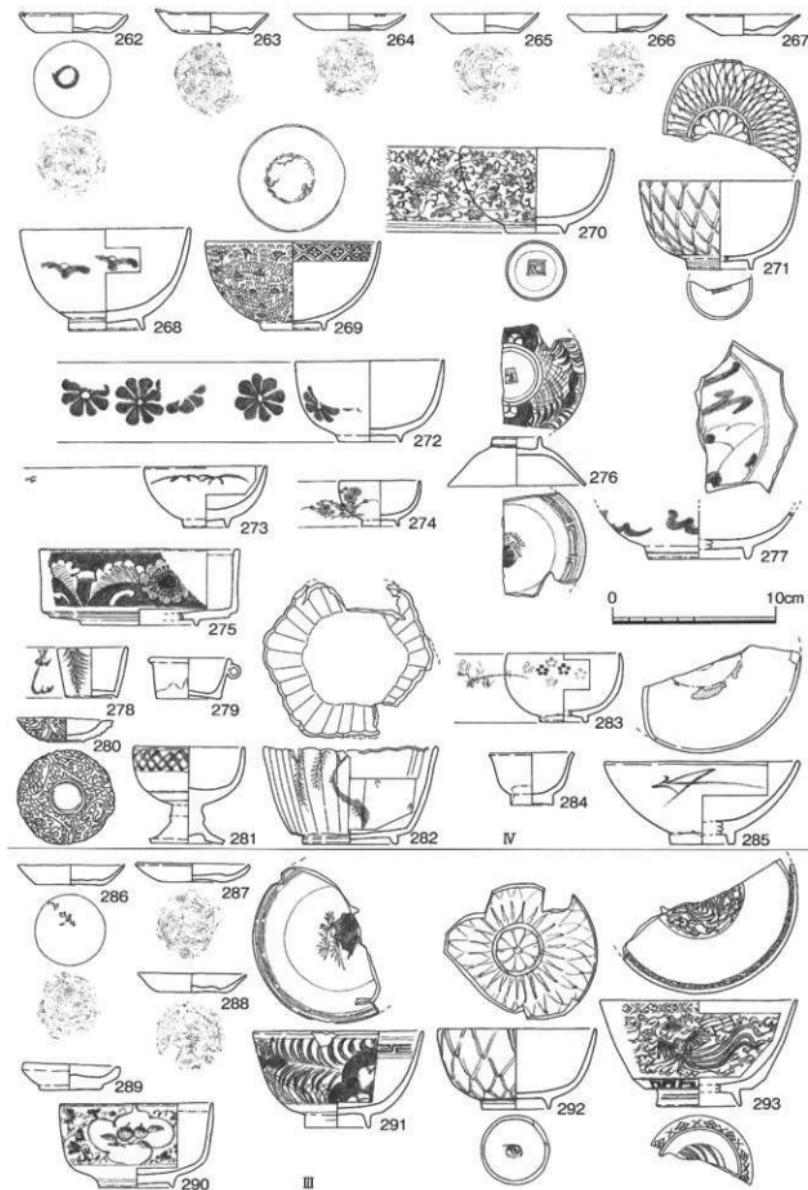
287は土師皿である。底部は回転糸切りで、口縁部に歪みがみられ、内面中央が若干盛り上がる。

288は土師皿である。底部は回転糸切りで、内外面ともに回転ナデを施す。

289は土師皿である。底部は回転糸切り後、全体的にナデを施し、部分的に消されている。

290は染付磁器の碗である。口縁部と高台脣付は釉剥ぎで、口縁部にはアルミナ砂を塗布する。外面高台に二重圓線、口縁部と腰部に一重圓線がめぐり、胴部に唐草文、区画文の中に橘文が描かれている。

291は染付磁器の碗である。脣付は釉剥ぎで、内面口縁部に雷文と上下にそれぞれ二重圓線、見込



第42図 IV層・III層出土遺物（土師器・磁器）(1/3)

みに一重圏線がめぐり、中央に岩文、松文が描かれる。外面高台に二重圏線、口縁部に一重圏線、腰部に三重圏線がめぐり、胴部に岩文、松文が描かれる。

292は染付磁器の碗である。疊付きは釉剥ぎで、外面高台に二重圏線がめぐり、胴部には二重網目文が描かれる。高台内には渦福、内面胴部には一重網目文、見込みには二重圏線がめぐり、見込み内には菊花文が描かれる。1700年代～1750年代の波佐見焼である。

293は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、内面口縁部に四方櫻文が描かれる。外面高台に二重圏線がめぐり、胴部に陰陽板文、宝巻文、宝珠文、雲文、内面見込みに雲文が描かれる。

一 III層出土遺物一（第43図・第44図・第45図）

294は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、焼成時に付着した砂目痕が残る。外面高台脇に二重圏線が、胴部に菊花文のコンニャク印判と草文が描かれる。高台内には「大明年製くずし」が描かれる。波佐見焼である。

295は色絵磁器の小碗である。疊付は釉剥ぎで、口縁部は外反する。外面胴部上位に一重圏線、下位に二重圏線がめぐり、梅花文が描かれる。高台内は一重の圏線がめぐり、文字文が描かれる。

296は染付磁器の小碗である。疊付は釉剥ぎで、見込みには焼成時に付着した砂目痕が残る。重ね焼きの痕跡である。外面には二重格子文が描かれる。波佐見焼である。

297は磁器の小壺である。削り出しで、口縁部は外反する。

298は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、外面高台に二重圏線、腰部に一重圏線がめぐり、胴部に松竹梅文が描かれる。内面口縁部に二重圏線、見込みに一重圏線がめぐり、見込み中央にコンニャク印判で五弁花文が描かれる。

299は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎで、外面口縁部と高台脇に二重圏線がめぐり、胴部に龍文が描かれる。内面口縁部に一重圏線、見込みに二重圏線がめぐり、見込み中央に文様が描かれる。

300は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎである。外面高台脇に三重圏線がめぐり、胴部に走龍文、雲文が描かれる。内面口縁部に二重圏線、見込みに一重圏線がめぐり、見込み中央に文様が描かれる。

301は染付磁器の碗である。疊付は釉剥ぎである。内面見込みには、一重圏線がめぐり、中央に変形文字文が、外面には草文、人文が描かれる。

302は色絵磁器の筒型碗である。疊付は釉剥ぎで、腰部は張り出す。外面高台に二重圏線がめぐる。高台脇から腰部にかけては二重圏線がめぐり、その内側に柳目文が描かれる。胴部には上位・下位に一重圏線がめぐり、中位には円文の中に菱形文と花文、区画刷り内に格子文が描かれる。内面見込みに二重圏線がめぐり、中央に環状の松竹梅文、口縁部に四方櫻文が描かれる。

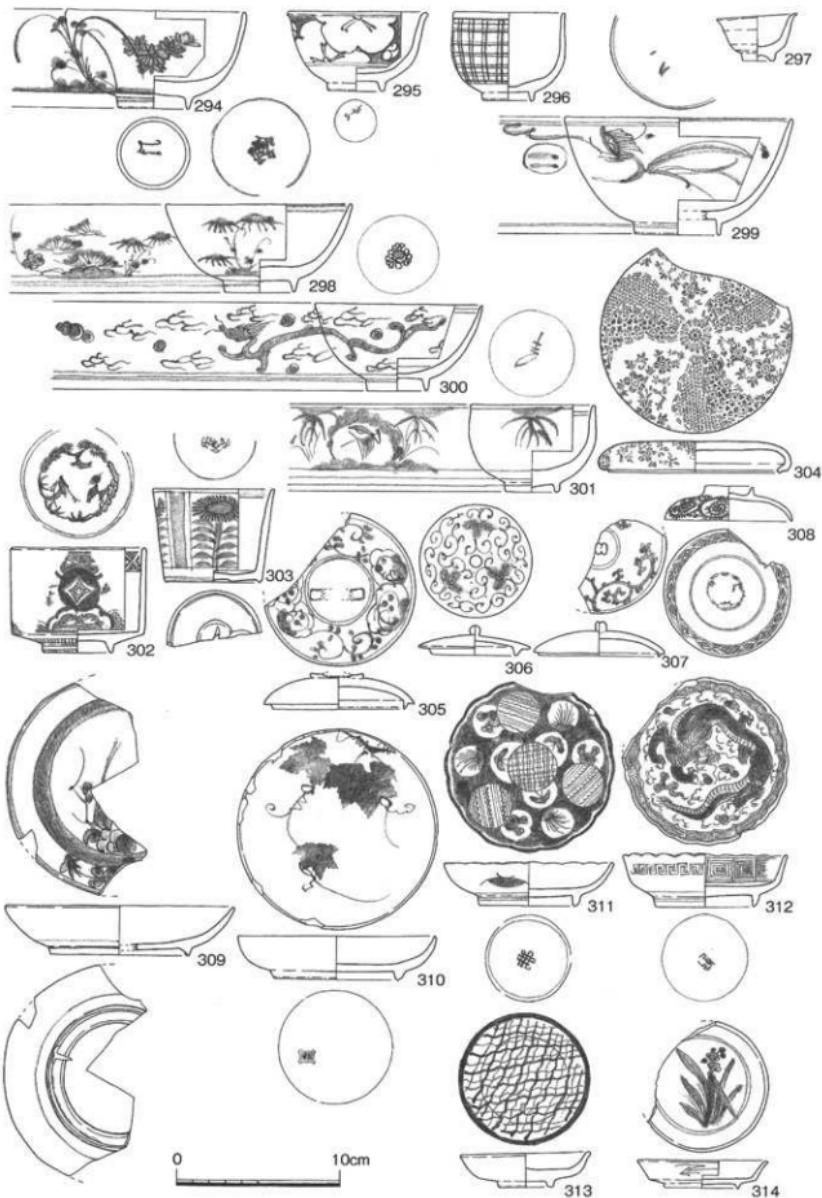
303は染付磁器の猪口である。蛇ノ目凸型高台で、胴部下位にから口縁部にかけてやや外反しながら立ち上がる。外面胴部下位に二重圏線がめぐり、胴部には区画文の中に草花文が描かれる。内面口縁部と見込みに一重圏線がめぐり、見込み中央には五弁花文が描かれる。

304は染付磁器の重箱の蓋である。口縁部は釉剥ぎであり。焼成時に付着した砂目痕が残る。外面には区画文の中に紗綾形文、四方櫻文、草花文、中央に菊花文が描かれる。染付は型紙摺り技法による。

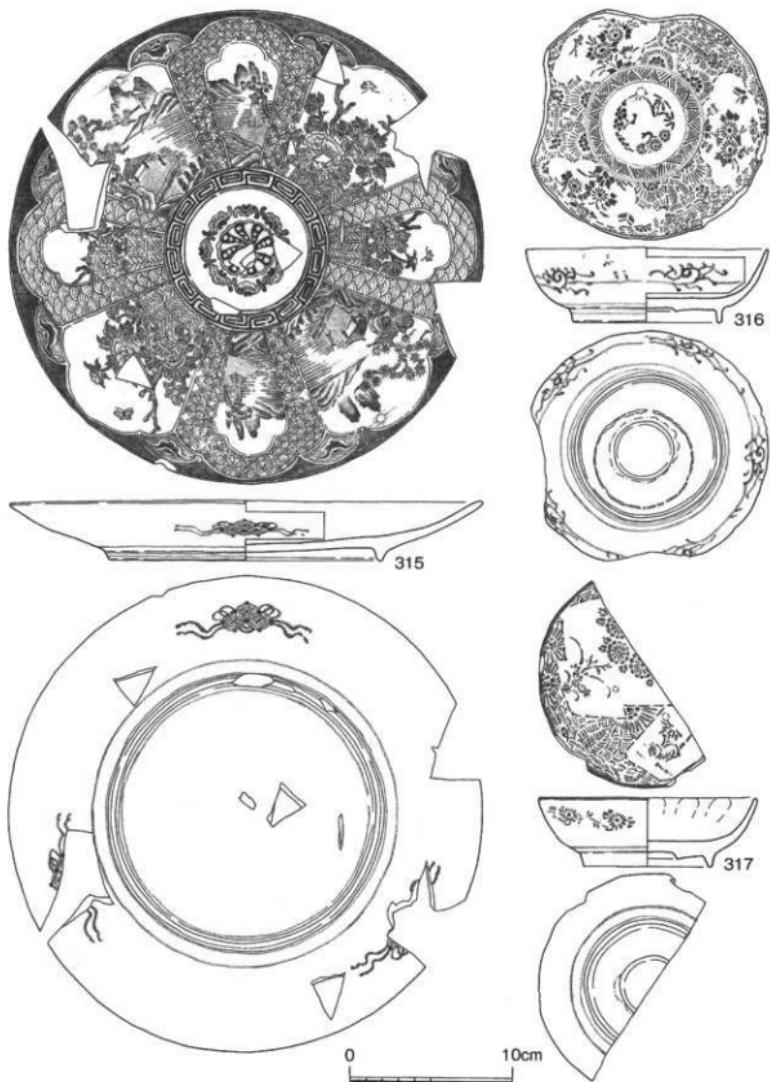
305は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎであり、焼成時に付着した砂目痕が残る。外面つまみ周囲に二重圏線、口縁部に一重圏線がめぐり、唐草文と不明文様が対になって描かれる。

306は染付磁器の蓋である。口縁部は釉剥ぎで、外面には唐草文が描かれている。

307は染付磁器の蓋である。口縁部は無釉で、アルミナ砂が塗られている。外面つまみ付近に二重



第43図 Ⅲ層出土遺物（磁器）（1/3）



第44图 Ⅲ层出土遗物（磁器）（1/3）

圈線、口縁部に一重圈線がめぐり、唐草文が描かれる。

308は染付磁器の蓋である。つまみ骨付は釉剥ぎで、外面はタコ唐草文が描かれる。内面は、見込みに二重圈線がめぐり、中央に松皮蔓文、口縁部に四方擇文が描かれる。

309は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで焼成時に付着した砂目痕が残る。内面口縁部に一重圈線、胴部に二重圈線がめぐり、草花文が描かれる。外面胴部、高台脇、高台内にそれぞれ一重圈線がめぐる。

310は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台には□に岩の瑠印が、内面は蔓草文が描かれる。

311は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎである。外面高台に二重圈線、腰部に一重圈線がめぐり、胴部に笠文、高台内に一重圈線がめぐり、中央に文字文、内面には多数の丸文が描かれている。

312は染付磁器の輪花皿である。疊付は釉剥ぎで、高台内には一重圈線がめぐり、中央に文字文が描かれる。外面高台に二重圈線、腰部に一重圈線がめぐり、胴部には雷文が描かれる。内面には、雷文、龍文、雲文、火焰文が描かれる。

313は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、焼成時に付着した砂目痕が残る。口縁部には縁飾が施され、内面には波文が描かれている。

314は染付磁器の小皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけてゆるやかに外反しながら立ち上がる。内面見込みに二重圈線がめぐり中央に草花文が描かれる。外面には折枝文が描かれる。

315は染付磁器の大皿である。疊付は釉剥ぎである。外面高台に二重圈線がめぐり、胴部に七宝繫ぎ文が描かれる。内面胴部に山水文、灯籠文、牡丹文、蝶文、見込みには雷文、文様が描かれる。315、316、317、318の染付は型紙摺り技法による。

316は染付磁器の輪花皿である。蛇ノ目凸型高台で、焼成時の重ね焼き痕がみられる。外面高台に二重圈線、腰部に一重圈線がめぐり、胴部に唐草文が描かれる。内面胴部には区画文内に蝶文、草花文、見込みに槍垣文、中央に環状の松竹梅文が描かれる。

317は染付磁器の輪花皿である。蛇ノ目凸型高台で、高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面高台脇に二重圈線がめぐり、胴部に花文が描かれる。内面には、区画文内に菊花文、竹文が描かれる。

318は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、口縁部は縁飾を施される。見込みは、二重圈線がめぐり、中央に寿字文が描かれる。内面胴部には、柳文、草花文、人文、岩文、橋文が描かれる。

319は染付磁器の皿である。疊付は釉剥ぎで、内面には草文が描かれている。内面見込みは蛇ノ目釉剥ぎである。全体的に貫入がみられる。

320は染付磁器の輪花皿である。高台疊付は釉剥ぎで、内面には鳥文、波文、唐草文が描かれる。

321は染付磁器の輪花皿である。蛇ノ目凸型高台で、チャツの溶着痕がみられ、窯詰めの際にチャツの口縁部に塗布されたアルミニウム砂が溶けたものと思われる。見込みには、二重圈線がめぐり、中央に兔文が、胴部には区画文の中に兔文、折枝梅文、文様が描かれる。

322は染付磁器の皿である。蛇ノ目凸型高台である。高台脇から口縁部にかけて内湾する。外面には唐草文が描かれる。内面口縁部に一重圈線、見込みに二重圈線がめぐり文様と雲文が描かれる。

323は磁器の仮飯器である。外面坏部には草文が描かれており、サビの付着がみられる。

324は磁器の仮飯器である。底部は削り出しで、外面にはタコ唐草文、花文が描かれる。

325は染付磁器の仮飯器である。底部は削り出し、疊付に砂目痕が残る。外面には二重の圈線がめぐり、斜格子文が描かれる。

326は磁器の仮飯器である。高台は削り出しで、疊付は釉剥ぎである。坏部は浅く、口縁部には炭化物がみられる。高台疊付には焼成時に付着したと思われる砂目痕がみられる。

327は磁器の合子の身の部分である。外面には、青海文+花文、四方櫛文が対になり描かれる。

328は青磁の小碗である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。

329は青磁の皿である。疊付は釉剥ぎで、高台脇から口縁部にかけて内湾する。見込みには鶴文、草文が描かれている。

330は陶器の小壺である。高台外面は面取りが施され、腰部から口縁部にかけて内湾する。

331は陶器の小碗である。疊付は釉剥ぎである。高台脇から口縁部にかけてゆるやかに立ち上がる。外面には水裂文が描かれている。玩具用である。

332はコーヒー牛乳瓶である。なで肩で口縁部は王冠栓である。胴部には「全型意匠登録、ジョーコーヒー、サクラヤ滋養珈琲、NET180 C.C.」の陽刻あり。底部にナーリングはみられない。

335は目薬瓶である。なで肩で、栓の形態はコルク栓で、胴部横断面は横長八角形を呈す。胴部外面には縱方向の溝があり、外面には「株式会社廣貫尚」「點眼水」の陽刻あり。

333は目薬瓶である。なで肩で、口縁部は欠損しているが、栓の形態はコルク栓である。胴部横断面は横長八角形を呈す。外面胴部には縱方向の溝があり、「大学目薬」「参天堂薬房」の陽刻あり。

335は目薬瓶（ガラス製両口式点眼瓶）である。なで肩で、表裏面に縫の溝や枠が施される。

336は白斐染めの瓶である。なで肩で、胴部には「万両」「線容定」「MADEINJAPAN」の陽刻あり。

337は薬瓶である。栓の形態はコルク栓である。扁平で、胴部横断面が梢円形である。

338はインク瓶である。底部は上げ底で、英語が陽刻されている。胴部断面は八角形で、栓の形態はスクリュー栓である。

339は瓦の二次加工品。表面には「神中」と彫られており、昭和23年に建てられた、神代村立神代中学校の校章と思われる。裏面には「TY」と彫られており、イニシャルと思われる。

340は土師皿である。底部は回転糸切りで、底部から口縁部にかけてやや斜めに立ち上がる。全体的に器壁が薄い。

341は磁器の筒型碗である。疊付は釉剥ぎで、腰部から口縁部まではほぼ垂直に立ち上がる。外面高台、腰部、胴部下位にそれぞれ一重圓線がめぐり、腰部に文様、胴部に草文が描かれる。内面口縁部に二重圓線、見込みに一重圓線がめぐり、中央にコンニャク印判の五弁花文が描かれる。五弁花文は、焼成時の熱しすぎで黒く変色しており、液垂れがみられる。

【参考文献】

大橋康二 1994『古伊万里の文様－初期肥前磁器を中心に－』理工学社

大橋康二・鈴田由紀夫・百田美和 2005『古伊万里の見方シリーズ2成形』佐賀県立九州陶磁文化館

桜井準也・八木環一 2006『ガラス瓶の考古学』六一書房

佐々田学・井立尚・原田博二・本馬貞夫・平尾良光・魯禪琰 2007『奥善町遺跡－市立図書館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』長崎県長崎市教育委員会

下川達彌・時枝克安・成享美・宮下雅史 2000『瀬古窯跡－「東長崎グリーンハイツ瀬古」造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』長崎県長崎市教育委員会

中野雄二 2012『べんざらのひとりごと』長崎県波佐見町教育委員会

中野雄二 2013『くらわんか藤田コレクション－寄贈記念図録－』長崎県波佐見町教育委員会



318



321



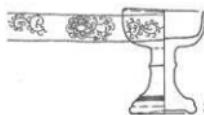
322



319



323



324



325



320



326



329



327



330 331



340



332



333



334



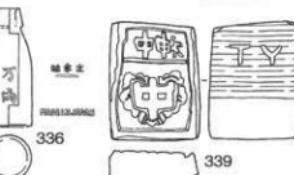
335



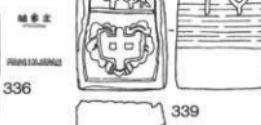
337



338



336



339



341

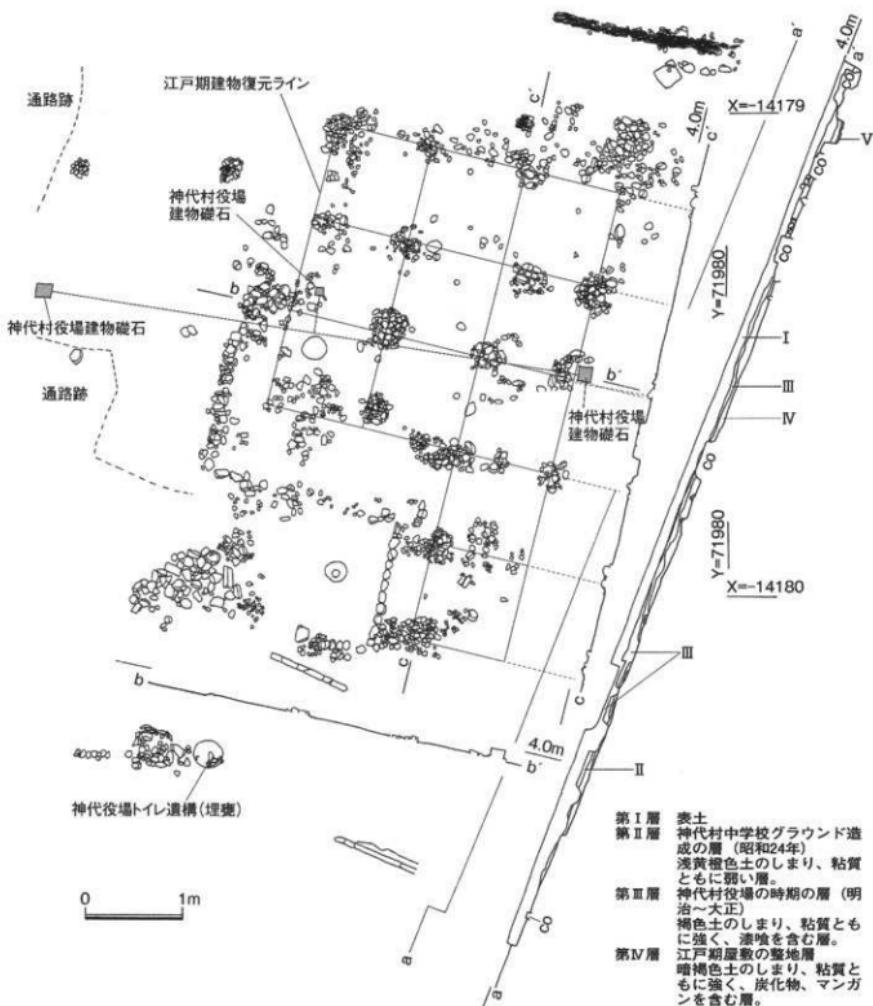


II b

第45図 Ⅲ層出土遺物（土師器・磁器・ガラス製品）(1/3)

検出された遺構と遺物

67



第46図 19区～24区江戸期建物基礎・神代村役場建物基礎検出状況・土層図（1/100）